



日本プライマリ・ケア連合学会
四国ブロック支部



発行人：阿波谷敏英,大原昌樹
事務局 〒761-2103
香川県綾歌郡綾川町陶 1720-1
綾川町国民健康保険陶病院気付
副支部長/事務局長 大原昌樹・土肥宛
Tel. 087-876-1185 Fax. 087-876-3795
E-mail oharamasaki@gmail.com

★ 第23回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部地方会

第30回四国地域医学研究会 第3回かがわ総合診療研究会 合同学術集会開催報告

大会長：三豊総合病院 中津守人

令和5年11月11日(土)～11月12日(日)、第23回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部地方会・第30回四国地域医学研究会・第3回かがわ総合診療研究会合同学術集会を、『with コロナ、after コロナ時代のプライマリ・ケア』～地域に寄り添うプライマリ・ケア医を目指して～をテーマに、香川県高松市の香川県立中央病院において開催させていただきました。2日間を通して、123名(学生13名 看護師・保健師3名、薬剤師5名、歯科医師1名、医師101名)(1日目は現地参加54名、Web参加42名、2日目は現地参加55名、Web参加36名)の方が参加されました。



開会式では、香川県医師会会長の久米川啓先生、日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部長の阿波谷敏英先生、かがわ総合診療研究会会長の高口浩一先生からご挨拶をいただいた後、四国ブロック支部功労賞表彰では、徳島県の谷憲治先生が表彰されました。

開会式の後、高知県立あき総合病院の的場俊先生と西予市立野村病院の大塚伸之先生の座長で、一般演題8題の発表があり、活発な質疑応答が行われました。



続いて、特別講演として、まんのう町国保造田歯科診療所の木村年秀先生から、『地域のつながりで進める食支援のかたち』という演題でご講演いただきました。

高齢者の移動手段の確保、買い物ツアー、医療人材の育成、子育て支援事業など、過疎地域での取り組みについてお話していただきました。

その後、小豆島中央病院の佐藤清人先生の司会で、「地域に寄り添うプライマリ・ケア医を目指して」をテーマに、各県で活躍されている4名の先生方にご発表いただき、シンポジウムを開催しました。

高知県の黒潮町国保拳ノ川診療所の澤田努先生からは、地域での南海トラフ大地震への備え、過疎地域におけるオンライン診療や医師の確保から医療の確保についてお話いただきました。香川県の水谷内科クリニックのコルビン真梨子先生からは、社会の変化に応じて対応できるプライマリ・ケアを提供する必要があること、地域フォーミュラーの必要性などについてお話いただきました。徳島県の岩朝病院の古川誠二先生からは、



医療や介護の悩みを気軽に相談できる暮らしの保健室、こころの居場所づくりについてお話いただきました。愛媛大学大学院医学系研究科地域医療学講座、西予市立野村病院西予サテライトセンターの二宮大輔先生からは、シームレスな地域医療の提供や、移動診療車事業についてお話いただきました。最後に木村年秀先生と阿波谷敏英先生から助言をいただきました。地域に寄り添うプライマリ・ケア医として、それぞれの置かれた立場で、その地域に何が必要であるかを一生懸命考えることが大切であると感じました。

1日目の日程が終了後、陶病院の川上和徳先生の司会で交流会が開催され、スタッフも含め44名が参加しました。

以前のように会員の皆様と顔と顔を合わせ、お酒を飲み交わしながら親交を深めることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。6名の学生さんから挨拶していただきましたが、皆しっかりと自分の考えを述べられ、非常に将来が楽しみであると思いました。



2日目は、高知大学医学部家庭医療学講座の岩下演久先生の司会でポートフォリオ発表会を開催しました。

今回から、徳島大学総合診療部の大倉佳宏先生、あき総合病院内科の江田雅志先生、高松平和病院内科の植本真由先生の3名の先生にコメンテーターをお願いしました。早朝にもかかわらず、多くの先生方へ出席していただき、活発な討議ができました。なぜその事例をポートフォリオに選択したのか、どの部分をもっと深めればよいか、次にどうつなげるかなど、ポートフォリオを作成したり、指導する上で非常に参考になりました。

続いて、美波病院の本田壮一先生と陶病院の川上和徳先生の座長で一般演題 8 題の発表がありました。どの演題も非常に興味深い内容で、活発な質疑応答が行われました。

その後、特別講演として、洛和会丸太町病院救急・総合診療科の上田剛士先生から、『コロナ禍で軽視されがちであった高齢者の身体診察』という演題でご講演をいただきました。

問診と身体診察の重要性について、改めて考えるきっかけになり、日常診療で非常に参考になる内容でした。

最後に、今回の開催県である愛媛県の愛媛生協病院の原穂高先生からご挨拶をいただき、無事大会を終了することができました。



今回も徳島大会に続いてハイブリッドでの開催となりましたが、大会の運営にあたっては、これまで各県で実施された大会の開催マニュアルが非常に参考になりました。大会開催を通じて、三豊総合病院のスタッフ全員で協力してチームで行えたこと、各県の学会員の先生方と顔の見える関係ができたことなどが大きな収穫であったと思います。

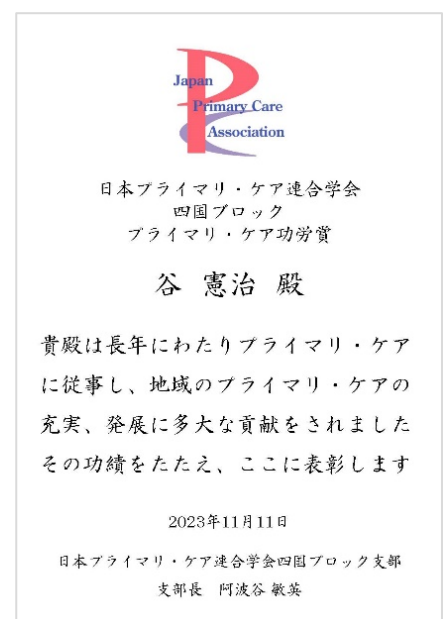
今回の大会の運営にあたり、ご協力いただいた地域医療振興協会のスタッフの方々、会場をお借りし、運営にご協力いただいた香川県立中央病院の先生方、そして学術集会にご参加いただいた会員の皆様へこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

今後、この学術集会に、多くの若い先生方や学生が参加され、益々学会活動が活発になればと考えています。

★ 谷憲治先生が四国ブロック支部プライマリ・ケア功労賞を受賞されました

四国ブロック支部長：阿波谷敏英

日本プライマリ・ケア連合学会は、長年にわたりプライマリ・ケアに従事し、多大な功績のあるものを顕彰するためにブロック支部プライマリ・ケア功労賞を設けています。本学会およびブロック支部の基本理念がそれぞれの地域での真摯なプライマリ・ケア活動にあることを広く知らしめることを目的としています。四国ブロック支部では、2017年から毎年、支部役員から推薦された会員を、支部長、副支部長の投票で選考しています。既定の得票に満たない場合は該当者なしとなることもあります。この度、谷憲治先生（徳島県・東洋病院）が受賞され、第23回地方会において授与式をおこないました。谷先生は、徳島大学大学院総合診療医学分野教授として、学生の地域医療実習や、プログラム責任者として家庭医療専門医、総合診療専門医の育成に努められました。また、地域医療教育研究会を立ち上げ、徳島県内のプライマリ・ケアの充実、地域医療レベルの向上に寄与され、その功績が高く評価されました。心よりお慶び申し上げます。



★ 四国ブロック支部プライマリ・ケア功労賞を受賞して

仁寿会 東洋病院 谷 憲治

このたびは日本プライマリ・ケア連合学会四国支部プライマリ・ケア功労賞という名誉ある賞をいただきまして、大変光栄に思うとともに関係者の皆様には深く感謝申し上げます。

私がプライマリ・ケア領域に関わるようになったのは2007年に徳島大学大学院に新設された「地域医療学分野（現在の総合診療医学分野）」に特任教授として就任したことがきっかけであります。それまでの私は内科医として、特に在籍していた徳島大学医学部呼吸器・膠原病内科の専門医としての活動に励んでおりました。そもそも私は、徳島県の山間部に位置する神山町の鬼籠野（おろの）という無医村地区で生まれ育ったことから、医学部を選択した目的のひとつに卒業後は医師不足に悩む地域医療に貢献したいという気持ちを持っておりました。しかし、6年間の医学生時代を終えて卒業時にはそういう意識は全く失せてしまっており、何を迷うことなく専門内科医として街中の大病院で勤める道を選んでおりました。そうなった理由を今となって思い起こしてみると、私自身が大学で受けた医学教育の内容が、あまりにも基礎医学教育と専門医教育に偏ってしまっており、プライマリ・ケアや家庭医療を学ぶ教育が不足していたところに問題があると考えられました。

私が徳島大学の地域医療・総合診療の教授に就任した2007年に文科省の医学教育コア・カリキュラムの改定がなされ、地域医療実習などの地域医療教育が必修化されました。それを受けて、翌年の2008年には徳島大学の医学教育に地域医療実習が導入され、2010年には地域枠の入学制度が始まりました。私自身は若手医師として地域医療現場に直接貢献する機会を持つていませんでしたが、出身大学において開始された地域医療教育に指導医として最初から関わることは大変すばらしい経験となりました。地域医療教育というそれまでになかった新しい教育システムを構築していくことは大変な作業ではありましたが、早くから取り組んでいる長崎大学や自治医科大学への視察で勉強させていただいたり、同じ時期に開始された四国や中国地方の各大学と情報交換を行うことでお互いに切磋琢磨することで現在のシステムを作り上げていくことができました。特に、徳島大学での特徴的な取り組みは医学生サークル「T-CoM 地域医療研究会」の活動です。2007年の夏、私が地域医療学分野の教授に就任した夏に行われた徳島県夏期地域医療研修に参加した11名の徳島大学の医学生に声をかけて結成されたサークルですが、現在は100名を超える医学生が在籍しています。このサークルによって入学直後の1年次から地域医療機関の視察を行うことができ、地域医療教育のEarly exposureとしての役割を果たしています。



私は2023年3月をもって徳島大学を定年退職することになりました。大変お世話になりご指導いただいた日本プライマリ・ケア連合学会の四国支部からこのような素晴らしい受賞の機会をいただいたことを大変うれしく思います。四国の地域医療がますます充実していくように、これからは地域医療現場から微力ではありますが貢献してまいりたいと思います。最後になりましたが、皆様のご健勝とご活躍を祈念してご挨拶とさせていただきます。大変ありがとうございました。

★ 四国ブロック支部会誌（論文集）の編集委員が決まりました

四国ブロック支部長：阿波谷敏英

四国ブロック支部会誌の編集委員が新しいメンバーになりました。これまで板東浩先生が長くご担当いただいていたのですが、このたび複数の委員による新体制で再出発することとなりました。ニュースレター43号でもお知らせしましたように、すでにブロック支部会誌についてアンケートを実施し皆様のご意見をいただいているところです。これまで培ってきた四国ブロック支部の伝統は守りつつ、若い先生方や多職種の方のご意見なども積極的に取り入れ、より多くの方に愛されるブロック支部会誌となることを願っています。

第17号（2024年度発行）からの新編集委員は以下の通りです。編集委員長は杉山圭三先生（愛媛県立中央病院）にご担当いただきます。

唐橋 真理子	香川	小豆島中央病院感染対策室	看護師
川本 龍一	愛媛	愛媛大学大学院医学系研究科地域医療学講座	医師
コルビン 真梨子	香川	水谷内科クリニック	医師
杉山 圭三	愛媛	愛媛県立中央病院総合診療科	医師
日前 敏子	愛媛	独立行政法人地域医療機能推進機構 宇和島病院	医師
本田 壮一	徳島	美波町国民健康保険美波病院	医師
森岡 弘恵	愛媛	市立八幡浜総合病院循環器内科	医師
八木 秀介	徳島	徳島大学病院循環器内科	医師

(50音順、敬称略)

【連載】プライマリ・ケア認定薬剤師、プライマリ・ケア認定看護師のご紹介

蓬萊 哲也 さん（株式会社レデイ薬局）

皆さん、はじめまして！株式会社レデイ薬局の蓬萊（ほうらい）哲也で御座います。

私は保険薬局のあるドラッグストアに勤務しており、現在は薬局店舗ではなく本社で人事系の業務に携わっており、特に地域連携と薬剤師採用の仕事が中心です。というふうに現在私は患者様に直接関わる業務ではなく、薬剤師の後方支援や地域貢献活動の業務になります。少し変わったポジションの仕事をしてはいますが、プライマリ・ケア認定薬剤師としての私の活動をご紹介します。

仕事柄、薬学生や大学教員の方々と関わる機会が多く、大学で薬学生の授業をしたり薬学生向けの研修なども実施しています。その授業や研修でプライマリ・ケア認定薬剤師として、薬学生にプライマリ・ケアについての内容を中心に話しています。私は以前、薬剤師や管理栄養士などの教育研修の業務に携わっていたので、その時の薬剤師向けのプログラムを薬学生向けにアレンジして実施しており、薬学生にはプライマリ・ケアの話をしなが、薬剤師という仕事に夢と希望を持ってもらうことを意識しています。



大学の医療経済学の講義では、「薬局が実践するプライマリ・ケア」という時間を設けて、日本プライマリ・ケア連合学会が提唱している5つの基本理念である「近接性」「協調性」「包括性」「継続性」「責任性」を、それぞれ実際に実施している事例を紹介して5つの基本理念の大切さを話しています。結果として『身近で気軽に何でも相談できる』薬局薬剤師が地域にいたら地域の方々は安心できるのではないのでしょうか。そのために薬剤師が取り組んでいることや課題などを薬学生に紹介して、薬剤師になってから幅広く地域医療に貢献してもらいたいという願いを込めています。

保険調剤関連のことはもとより、処方箋以外の相談にも対応していくということも大切で、そのために専門性はもとより、幅広い知識や多職種連携が重要になってくるということを薬学生や薬剤師に認識してもらい、処方箋以外の相談対応に関わる研修なども実施しています。

特にニーズがあり、研修の依頼を受ける内容はOTCカウンセリングです。OTC医薬品の適正使用のためにも、聞き漏れのないように聞き取りをして、その情報をもとにOTC医薬品を選択して、ニーズに合ったOTC医薬品を適正に説明し、+αの健康アドバイスをするという内容のロールプレイを実施しています。このロールプレイは、薬学生に実際のドラッグストアの売場で数多くあるOTC医薬品の中から選んでもらいます。優秀な薬学生は、症状だけでOTC医薬品を選ぶのではなく、ライフスタイルなど個々の特性に合わせてOTC医薬品を選んでいきます。またOTC医薬品を選ぶだけでなく、受診勧奨、受診勧告、話を聞くだけ、救急などへの対応もあることも付け加えています。



次にニーズがあるのがコミュニケーション関連の研修です。OSCEに関連しているコミュニケーションの基礎演習、質問技法や傾聴法の基礎中の基礎演習などを中心に実施しています。持っている知識を最大限に発揮するためには、コミュニケーション技術が大きく関わってくるとことを認識してもらい、理論だけでなく演習でそれを感じ取ってもらうように取り組んでいます。



薬学生や薬剤師の講義・研修などでは、地域の方々に『身近で気軽に何でも相談できる』薬局薬剤師として認識していただくために、具体的にどういうことをしていかなければいけないのでしょうか？ どういうスキルやナレッジを身につけなければいけないのでしょうか？ という問いかけをしています。

この答え全てがプライマリ・ケア認定薬剤師に必要なことではないのでしょうか。この答えはたくさんあると思います。それぞれ薬剤師のおかれた環境が違うので、その状況で具体的にヤルベキことが多少変わってくると思います。

これからも、今の私にできることを一生懸命に実施していきたいと思いますので、皆様、御指導を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い致します。

追伸 四国に住みながら趣味のスキーも頑張っています！

昨年はシーズン 51 回滑りに行ったので、今年も 50 回以上滑りに行くことが目標です。スキーヤーの方がいらっしゃったらご一報をお待ちしています。



【新専専門医ご紹介】

久武 加奈 先生 (JCHO 高知西病院)

2023 年に家庭医療専門医を取得しました、久武加奈と申します。2018 年度に高知県立病院群総合医・家庭医養成後期研修プログラムでの研修を高知県立あき総合病院で開始し、2 回の産前産後休暇・育児休暇を頂き、計 5 年で研修を修了し、今年度専門医を取得しました。

私は高知県出身で、ずっと高知で生活してきました。これまでを振り返ってみて、家庭医を目指すきっかけとなったのは、初期臨床研修中に救急搬送されてきた患者さんだったと思います。90 代で呼吸苦を主訴に搬送となり、酸素化不良のためすぐに気管内挿管をされ人工呼吸器管理となりました。治療としては正しかったはずでしたが、心にわだかまりが残り、普段どんな生活をしていたのかな、延命治療についてどう考えていたんだろう、と気になったのを覚えています。

その経験から数年間で様々なご縁があり、訪問診療や総合内科の経験をさせて頂く機会に恵まれました。医師として自分の目指す像は家庭医だと確信し、7 年目に後期研修を開始しました。後期研修中には小児から高齢者まで様々な年代の患者さんの診察に関わることができました。その時間の中で自分なりに一番成長できたと感じている点は、患者さんとの関わり方についてです。元々人と話をするのが好きで、診察中に患者さんから普段の生活について話を聞くことが好きでした。後期研修を開始して、ただ聞くだけではなく疾患に対してのアドバイスを返したり、生活史を整理したり、ということが自然にできるようになりました。診察中の一見雑談に聞こえる話にも深みが増し、患者さんから質問されることも増えたと感じています。

家庭医としての一步は踏み出したばかりであり、知識的な向上はもちろんですが、「まず診る」「患者さんと一緒に考える」姿勢を大切に、今後も真摯に患者さんと向き合っていきたいと考えています。そうすることで、患者さん自身の望む医療に少しでも貢献できる医師として成長していきたいと思っています。今後ともよろしくお願い致します。



岩下 演久 先生 (高知大学医学部家庭医療学講座)

はじめまして。2023 年度に家庭医療専門医となりました岩下演久と申します。専門医研修は神奈川県横浜市にあります生協戸塚病院で行っていましたが、この4月から高知大学医学部家庭医療学講座に所属しながら高知市土佐山へき地診療所の医師として働いております。卒業以来9年ぶりに高知に戻ってきまして慣れないことも多くありますが、ここ四国の地で腰を据えてやっていきたいと考えております。よろしくお願いたします。



簡単ではありますがこれまでの事、そしてこれからのやっていきたいことなどをお話させていただきたいと思っております。私は高校卒業後に教育系の大学に進学して社会人として働いてから、平成21年4月に高知大学の医学部に入學いたしました。同期に恵まれて助けてもらいながら卒業し、ちょうど40歳の年に医師となり東海大学附属病院(伊勢原)で初期研修を開始しました。初期研修を始めた頃は、周りに教えてもらいながら毎日をとにかく何とか乗り切っていくことだけで精一杯でしたが、少しずつ余裕が出てくる中で自分の進路について考え始めまし

た。治療を誤りなく進める最後の要となる病理診断の道へ進みたいという気持ちがありましたが、毎日顔あわせて会話をしている患者さんが急性期治療を終了し退院調整を進めていく過程に研修医として参加させてもらえたことが、退院後にどういった生活を送っていくのか気になっていましたし、その生活を支えることを仕事に出来ないものかとも感じていました。最終的に初期研修修了後は病理医としてのスタートを切り、診断や剖検などに追われる日々は充実していましたが、徐々に患者さんの生活を想像することはなくなりました。そんな中で、今度は自分の親の介護に関わるようになり、改めて医療と生活を密接に考えることとなりました。すると不思議なもので初期研修医の頃に関わった方達が思い出されるようになり、やはり患者さんの生活に一番近いところで医師として働くことがやはり自分としてはやりたいことだと気が付き、家庭医療専門医への道を歩むこととなりました。研修病院に配慮を頂きながら介護と両立させながら研修を進め、令和5年3月に修了することが出来ました。同時期に介護も一段落しましたので、学生時代にお世話になりました阿波谷先生から声をかけていただいたこともあり高知に戻ってきました。

高知に戻り土佐山という地区に一人の医師として関わっていく中で、患者さんやそのご家族、診療所のスタッフをはじめ、周りの人たちに多くのことを教えてもらいながら過ごしております。また、教員として学生さんと話す中でプライマリ・ケアの重要性とそのやりがいについて伝えていきたいと思いつつ、なかなかうまく伝えられず力量不足を感じることも多くあります。専門医になりたてでまだまだ精進しなければならないことが多くありますが、一步一步進んでいきたいと思っておりますし、プライマリ・ケア連合学会四国支部の活動に少しでも力を尽くすこと出来ればと思っております。至らない部分多くありますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

